

「探検」される十勝

国際理解

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



1800年、皆川周太夫が十勝川をのぼってきて上陸した場所。旧帯広川・パラプト(帯広市東10条南4丁目)。

17世紀、ロシアは清(今の中国)との戦いに敗れ、サハリンへの南下をいったんあきらめ、シベリアを東に進みカムチャツカにまで領土を広げました。そして、18世紀中ごろには、千島列島南部にまで南下してきています。

これを知った江戸幕府は、北海道を対ロシアの前線と見なして、北海道、千島列島の調査を始めます。

また、1799年から北海道の太平洋側を、1808年には北海道全体を直接支配するようになりました。

1807年には、エトロフ(択捉島)で幕府兵(南部・津軽藩士)とロシア人が武力衝突しています。

1821年、北海道は松前藩支配にもどりませんが、1854年、再び幕府が直接支配し、幕府がたおれるまで続きます。

名前	十勝に来た年
最上 徳内	1786
近藤 重蔵	1798
渋江 長伯	1799
伊能 忠敬	1800
皆川周太夫	1800
磯谷 則吉	1801
今井八九郎	1828
松浦武四郎	1845・1856・1858
窪田 子蔵	1856
成石 修	1857

探検家たち

1785年から幕府の北海道調査が始まります。

1785～86年には最上徳内が、日高・十勝・釧路・厚岸・国後島・択捉島・ウルップ島にやってきました。彼はアイヌの人の生活にだけこみ、1791年にはアイヌ民族救済のために、再びやってきます。

日本の測量で有名な伊能忠敬は、1800年に函館から十勝・釧路までの海岸線を測量していきました。

同じく1800年には皆川周太夫が虻田を出発し、大津(豊頃町)から十勝川をさかのぼって、内陸を調査しました。帯広にも寄っていて、パラプト(旧帯広川・水光園近く)で上陸し、アイヌの人の家に泊めてもらっています。その後、ニトマップ(人舞・清水町)から山をこえて、日高地方の沙流川上流に出ていきました。

幕末に十勝をおとずれたおもな探検家や旅行者。

幕末最大の探検家「松浦武四郎」

1845～1858年までの間に、6回も北海道を旅したのが、松浦武四郎です。十勝へもきて、十勝川や歴舟川ぞいなどを歩き調べています。「北海道」という名前を考えた人です。

アイヌ女性に当時貴重だった針をプレゼントするなど、心配りをする人で、アイヌの人々に信頼され、アイヌ文化をよく理解した人でもありました。アイヌに対する和人のひどい支配もふくめて、北海道について細かく記録を残しています。

これら「探検家」は、見方を変えれば、アイヌ民族が暮らす土地に入りこんできた人たちです。

彼らは、アイヌの人々に案内をたのみ、地名や情報を教えてもらうほか、川を行き来する時はチッ(丸木舟)に乗せてもらい、夜にはチセ(家)に泊めてもらうなど、さまざまな手助けをってもらうことで、調査をすることができたのです。



松浦武四郎による十勝の図。十勝川河口からヤムワッカヒラ(幕別本町)のあたりまで。(『東西蝦夷山川地理取調図』より)

1 松浦武四郎(まつうらたけしろう): 心配りがある上、何よりその人がらがよかったようである。相手のすぐれたところを素直に尊敬し、理にかなっていれば同行した和人の役人よりもアイヌの長(おさ)の意見をとり、体調が悪くても宴会につきあい、お礼

を忘れず、やとった案内人に対しても思いやりをもって意見を尊重する。同時に、するどい観察力があり、わずかな滞在記録の中から当時の問題点がうかび上がってくる。記録・報告書には、あたたかみやユーモアがあり、すぐれたエッセーともなっている。